

もう以前にはもどれない・・・見えてしまったから。 その壁の向こうに素晴らしい景色があることを・・・

7月15日、新チームのミーティングが行われた。「応援されるチーム、勝ちを目指すチーム」これまで先輩が積み重ねてくれた理念を継承する。そして、夏の大会を見据えたチームの目標を決めようとした時、当然のような表情で先輩たちより1つ勝って、4回戦・・・と発言があった。ロ々に似たようなことをつぶやく。その中に「甲子園」と発する選手がいた。その瞬間、笑いが起きた。様子を観ていた顧問から選手達に確認するかのように言葉を投げかけられた。去年も同じような理由で3回戦が目標となった。でも、3回戦を見事に決め、目標を達成したにも関わらず、誰も満足していなかったように感じた。本当は変わりたいと思っているのに変化のないチームをもう一度繰り返すことができるのかと。その先の眩しい光を見てしまっているのに・・・。知ってしまったら、もう戻れないのではないかと。「甲子園」と目標を口にした選手を他のみんなは笑って終わらせてしまって、本当にいいのかと。すると、選手達の表情が一瞬で変わった。確かに夏の大会での達成感と勝利への渴望を感じたはずだったのに。チームはもう戻れないことを全員が自覚した。選手の覚悟の言葉が続く。今までとは野球との向き合い方を変えていく覚悟をもとう。そして、最後の夏、自分たちが最後まで野球をする。「甲子園優勝」と。そこには、もう笑いが起きない。チームの歴史がまた大きく変わろうとした瞬間だった。ただ、遠く離れた「甲子園」という場所にイメージが湧いてこないことも事実だ。そもそも甲子園って・・・。「だったら・・・甲子園を観に行こう。」チームの士気は上がり、ミーティングは終わった。

新チームの練習がはじまり、彼らは、1つずつ、これまでの練習や戦術のとらえ方を確認していった。練習の意図の理解やメリハリのつけ方、言葉がけの工夫・・・このチームの基準をつくる作業だった。そんな中、選手達が練習内容を組み立ててみたいと顧問に提案してきた。そこで夏休みの最初の数日間は、選手達だけで練習を行うことになった。思うようにはいかなかったようだが、その日の改善点を顧問に相談し、積み重ねることで練習への向き合い方も変わってきていた。暑さで疲れた選手を励ます声、練習の意図が分かっていない選手へのサポートなどチームのつながりを強くしていった。とても有意義な練習となっていた。ただ、選手達の負担は大きく、やはり、顧問にその役割を委ねることを選手達は決めた。チームの中で指導者やマネージャーなど、それぞれの役割を選手達は改めて認識することができた。



8月中旬、大阪遠征。朝早くに横浜を出発し、昼過ぎから大阪の強豪2チームとの練習試合をおこなった。試合は、2点リードの接戦だったが、最終回にサヨナラ負けを喫してしまった。しかし、選手達は自分達でもここまでできるんだと自信を得た表情をしていた。その後、相手校の監督さん達から部員に向けて、話をさせていただく機会があった。あなた達は、本気で勝つ気があるのか。もし勝つ気があるのなら、考えなくてはならないところが欠如している。ベンチにいる選手も全員がどうやったら、勝つことができるか考えた方がよいと彼らに解りやすく具体例を挙げながら説明して下さった。選手達の顔が変わった。そんなところまで考える必要があるのか・・・でも、自分達でもできそうだと・・・そんな表情になって

いた。さらにもう一人の監督さんが、「私のチームは、大阪桐蔭と履正社に勝って甲子園に行くチームです。覚えておいてください。」と話しはじめた。その真っすぐに堂々とした言葉に圧倒されていた。自分達が照れ笑いをしながら、口にした「甲子園」という言葉とは、覚悟の違いを感じていた。そして、格好いいとその姿を憧れに近い感覚で彼らは見ていた。大阪遠征は、すでに彼らの心を大きく揺さぶる転機となっていた。2日目も強豪私学との対戦。パワーの凄さを感じたが、ヒントも大きく得る試合となった。そして、3日目。いよいよ甲子園の見学。部員はアルプススタンドでの観戦だった。試合はシーソーゲームで延長戦までいく激戦だった。応援のボルテージが上がり、球場全体が揺れている。同じ高校生なのに違う次元の世界・・・憧れの場所に選手達は魅了されていた。この3日間で「甲子園」とは何か少し肌で感じる事ができた。そして、チームとしてまた少し違うステージに立つことができたようだ。



大阪遠征から10日後、秋季地区予選が始まった。大阪遠征から練習試合の内容も取り組みも明らかに変化が見えていた。自信をもって臨んだ地区予選だったが、相手はこの夏の大会でベスト4まで勝ち上がった強豪の横浜商業高校だった。それでも、果敢に彼らは挑んでいった。途中4点のリードを許していたが、一歩も引かない姿勢で勝負をしていた。後半2点差まで追い上げる。一打同点のチャンスもつくるが、最後は力負けしてしまった。ただ、これまでの様に負けて、仕方がないという表情ではなかった。2戦目は逗子開成高校。彼らは、敗戦を引きずらず、序盤から終始、勢いを緩めることはなかった。結果はコールドでの勝利。3戦目は山手学院高校。勝ったチームが県大会へ出場となる大一番だ。過去の戦績や実力を比べると相手チームの方が格上だった。それでも、勝つことだけに彼らは集中していた。試合はシーソーゲームで始まったが、中盤相手にリードを許してしまった。何とか後半追い上げていったが、追いつくことができず惜敗してしまった。ただただ、悔しい・・・。自分の力をすべて出し切ったわけではなかった。これまでのチームなら、この2チームなら負けても仕方がないどこか諦めている自分達があった。でも、大阪遠征に行ってからとはそうではなくなっていた。試合が終わって、悔いが残る。勝負にこだわるチームに成長していた。この負けがあったから、今の自分達があると胸を張って言えるチームになろう。そう誓える強さが芽生えてきていた。次の公式戦まで長い道のりとなる。この先、彼らには多くの壁が立ちはだかる。時には、立ち止まることもあるかもしれない。でも、その度に自分達の枠を超えることができるチームだと信じて、前を向いていきたい。

